一貫した学士課程教育の再構築と質保障

—教育改善ＦＤ研修会を通じた取組—

小　川　　勤

要旨

2008年12月24日，文部科学省から中央教育審議会（以下中教審）の答申「学士課程教育の構築に向けて」（以下学士課程答申）が公表され，この答申の中で社会からの負託に応えられるような質の高い一貫した学士課程教育の充実が最も重要な課題であることが明らかにされた。これを受けて本学では大学教育センターと各学部・研究科が一体となった「教育改善FD研修会（以下　教育改善研修会）」を平成20年度から２年間にわたって開催した。本稿ではこの取組について実施以前の状況や研修会の開催趣旨，研修内容などを紹介する。また，この取組の中でカリキュラムマップ（以下　ＣＵＭ）の改訂やカリキュラム・フローチャート（以下　ＣＦＣ）の導入といった新たな教育改善のためのツールを開発したがその内容についても明らかにする。２年間の教育改善研修会を通じて，教員にとっては学生の視点からカリキュラムを組み直すことで，教育に対する意識改革が行われるようになったことや有機的に関連づけられたカリキュラムは，最適の内容を最適のタイミングで教えることによって効率化が可能になり，無駄を省いてコストパフォーマンスの高い教育が実現できるなどの教育成果が明らかにされる。

キーワード

学士課程教育　教育の質保障　教育課程　カリキュラムマップ

１　はじめに

2008年12月24日に中教審が公表した学士課程答申の中で，ユニバーサル化とグローバル化が同時進行する日本の高等教育において，社会からの負託に応えられるような質の高い学士課程教育の充実が最も重要な課題であることが述べている。さらに，同答申の中では学士課程教育の質の維持・向上によって国際通用性を備えた「21世紀型市民」を育成し，「学士」という学位の質を保証することの重要性も述べられている。

そこで本稿では学士課程答申の趣旨を踏まえつつ，かつ，４年間または6年間の学士課程教育の再点検を推進するために本学が平成20年度から２年間にわたって取り組んできた「教育改善ＦＤ研修会（以下　教育改善研修会）」の開催趣旨や研修会の内容，さらに再点検を推進するために従来から利用してきたＣＵＭの改訂内容や新規に導入したＣＦＣなどについて紹介する。

２ 中教審答申のこれまでの審議の経緯

２．１　本取組前の状況と課題

本研修会が開始される前の各学部・研究科ではそれぞれ教育の目的や目標だけでなく，卒業認定や学位授与の規定を学則等に明示し，WEB上に公開していた。学生に対しては，入学時のオリエンテーションなどを通じて，卒業要件などについて周知徹底が図られ，４つの「求める学生像」を中心としたアドミッション・ポリシー（以下ＡＰ）も策定されていた。また，これらと連動する形で，

卒業時までに学生が身につけるべき基本的な資質を具体的に記述したグラジュエーション・ポリシー（以下ＧＰ）を策定し公開していた。さらに，平成18年４月からはラーニング・アウトカムズとしてのＧＰと各授業の到達目標との間の合理的・整合的な関係性を示すＣＵＭが，各学部・研究科単位で策定され公開された。

このように本学の教育改善は他大学に比べて早く，ＧＰ，ＣＵＭの取り組みは平成20年４月の大学設置基準の改正が実施される以前から独自に取り組んできたといえる。

しかし，その内容については，全学FDで紹介する他，教育機構の紀要である「大学教育」等を通じて公開されていたが，一連の教育改善プログラムが全ての教員にまで十分浸透しているとは言えない状況にあった。

一方，カリキュラムの面から本学の教育を考えた場合，各学部で策定されているカリキュラムは教員の専門分野を中心とした，いわば教員の視点から構成されたものであったことは否めない。学生が卒業時に身につけている資質は，カリキュラムが直接保証する学士の必須要件というよりは，偶発的に得られる間接的な成果に過ぎなかったと言える。その結果として，各所にさまざまなミスマッチが生じてきたのも事実である。

このような本学の教育環境の中で，現在進行している入学者の多様化と平均的な習熟度の低下に対応するためには，教員が独自の授業を展開するだけでなく，誰が何をどこまでどのように教えるかという組織的な連携が求められるようになっている。そもそもこのように有機的に組み立てられたカリキュラムこそがカリキュラムと言えるのであって，従来のカリキュラムは教える内容が組織的に吟味されないままの授業の寄せ集めであったと言える。

さらに，山口大学の教育改善の手法が，卒業生や学外の関係者からの評価・批評を受ける態勢が整っていないため，実質的な改善への手立てがまだ十分とは言えない。現時点では，教員ができる限り学生の視点に立って教育改善を行おうとしているに過ぎず，そのプロセスや改善成果は公開されているものの，それだけで卒業生や学外関係者から直接的検証が受けられるわけではない。

上記のような現状認識の上に立って，これら課題にどのように取り組むかを考えた結果，次項で述べるような改善を試みることになった。

２．２　課題解決に向けた教育改善研修会の企画と実施

前項で述べた課題を解決していくためには，目標達成型大学教育改善の意義や役割を全教員の共通理解の下に共有し，ＦＤ活動を通して組織的な教育改善活動を活発化させていくことが必要であると考えた。

また，人材養成目的に合った合理的なカリキュラムの実現のためにはＦＤ活動の実質化を図る必要があると考えた。

そこで，各学部と大学教育センターとが一体となった教育改善研修会を２段階に分けて２年間（平成20年度～21年度）かけて実施することにした。

まず，この研修会の開催目的を検討した結果，以下のように決定し，学内委員会（教学委員会等）に提案し周知徹底を図った。

この２つの目的を達成するために，全学FD活動の中に新たに「教育改善ＦＤ研修会」という名称の研修会を設置し，全学体制で取り組むことになった。また，上記（１）（２）の目的を達成するための研修会を（１）については平成20年度，（２）については平成21年度に実施することになった。さらにそれぞれの目的に応じた研修内容や研修方法を大学教育センター内で検討することになった。

３．平成20年度の教育改善研修会の内容

表１　教育改善研修会の２つの開催目的

（１）各学部・研究科と大学教育センターとが一体となった教育改善ＦＤ研修会を実施し，常に学生の視点から教育内容の再検討を行えるように教員の意識改革を図る。
（２）学生の視点から見たカリキュラムの見直しを組織的に行うために，各学部・研究科での推進役（ＦＤデベロッパー）を養成するとともに，育成した人材と大学教育センター，教育コーディネーターとが一体となって教育改善ＦＤ研修会を実施し，常に学生の視点から教育内容の再検討を行えるようにカリキュラムやＧＰ，カリキュラムマップなどの見直しを図る。

平成20年度には，表２のような日程でセンター長を含むセンターの専任教員が講師となって当該研修会を全ての学部・研究科の全教員を対象にのべ８回開催した。

各学部・研究科では拡大教授会（助教以上の教員）の中で30分程度の研修時間をいただいて，山口大学が現在展開している「目標達成型教育改善」の考え方や組織的な教育改善の意義や必要性について教員間の共通理解を深めることを主な目標として実施した。大学教育センターでは当該研修会で使用するプレゼン用教材や配布資料を事前に検討しで開発し，当該研修会に臨んだ。

３．１　平成20年度の研修会の成果

平成20年度に実施した教育改善ＦＤ研修会に参加した先生方の研修終了後の意見や感想から，当該研修会については以下のような成果を上げることができたと考えている。

- ■ ＧＰ，ＣＵＭ，Ｗｅｂシラバス，学生授業評価，教員授業自己評価などの相互関係について，ほとんどの山口大学の教員が共通理解を持つことができた。
- ■ 教育改善のＰＤＣＡサイクルを共通認識できたことにより，このサイクルが十分機能しているかどうかを各学科・コースが理解することができた。
- ■ 卒業時の質保証ができる教育課程となっているかどうかを確認する必要性や山口大学が取り組んでいる教育改善と法人評価との関係について理解することができた。
- ■ 従来は組織的ＦＤといえば全学ＦＤ（講演会やアラカルト型全学研修会への参加等）であると考えている先生方が多かったが，日常的に個々の授業の改善や今回の研修会のような学部ごと

表２　平成20年度の教育改善研修会の実施状況

①	人文学部および同関連研究科	７月16日（水）	14:30－15:00	担当：岩部
②	教育学部および同関連研究科	６月18日（水）	15:00－15:45	担当：岩部
③	経済学部および同関連研究科	11月19日（水）	13:30－14:00	担当：小川
④	理学部および同関連研究科	６月25日（水）	14:30－15:15	担当：吉田
⑤	農学部および同関連研究科	６月18日（水）	14:30－15:00	担当：木下
⑥	工学部および同関連研究科	11月12日（水）	14:15－14:45	担当：岡田
⑦	医学部および同関連研究科	10月８日（水）	16:10－16:40	担当：吉田
⑧	技術経営研究科（ＭＯＴ）	９月８日（月）	10:00－10:30	担当：木下

図１　教育学部の教育改善研修会の様子
（平成20年6月18日実施）

のＦＤを通じで教育改善を図る必要性があることが理解できた。

■　大学教育センターも巻き込んだ形での学部ＦＤ活動を行うことによって，学部のＦＤ活動の負担が軽減できることがわかった。

■　大学教育センターとしても学部のＦＤ活動を積極的に支援していきたいというスタンスを学部や研究科の先生方に理解してもらうことができた。

以上のように，学生の視点からカリキュラムを組み直すことの重要性や組織的なＦＤ活動の必要性などについて，学部教員間で共通理解できたことや学部・研究科と大学教育センターとがさまざまな形で協力し合うことができることを相互に再確認できたことは平成20年度の当該研修会を実施した上での大きな成果であったと考えられる。

３．２　平成20年度のＦＤ研修会を通して見えてきた課題

平成20年度の教育改善ＦＤ研修会を通して，山口大学が推進している目標達成型教育改善やＰＤＣＡサイクルの考え方，授業評価などに対して実に多くの意見や提案が寄せられたが，以下，それを集約したものを紹介する。

■　教育改善のための山口大学のＰＤＣＡサイクルの意義や目標達成型教育改善の必要性は当該研修会に参加して理解できたが，組織的にどのようにそれに取り組んでいったらよいのか具体的な手法がわからない。

■　ＧＰやＣＵＭ，さらにシラバスを組織的に見直せということであるが，どのようなＧＰやＣＵＭまたはシラバスがよいのか何か雛形を示して欲しい。あるいは，ＧＰやＣＵＭを作成する上で参考になる学部や学科の例を示して欲しい。

■　学科レベルにおけるＧＰやＣＵＭ，Ｗｅｂシラバスの作成や改善についてのＦＤを大学教育センターが中心となって開催して欲しい。

■　学生授業評価は学生の慣れと評価疲れがあるので，果たしてどの程度有効なのか疑問である。学生授業評価の有効性について検討して欲しい。

■　工学部では既にＪＡＢＥＥへの取り組みを行っており，ＧＰやカリキュラムマップをどのようにしなければならないかは既に決まっている。

■　個々の授業からカリキュラムマップ，ＧＰへ向かって改善を行っていくと，目標達成のために次第に目標設定を下げることに繋がる恐れがあるがどのように考えたらよいのか。

■　昨今では社会人力や社会人基礎力といったものが要求されるようになってきており，それらも取り込んだ形で，ＧＰやＣＵＭを再構成していくことが今後必要であろうが，学部としては授業の中で社会人基礎力をどのように育成していくのかがまだ明確に見えてこない。

■　学生主体の教育を求めて行くと，現状の学部組織の在り方との整合性が問題になる可能性があるという指摘があっ

た。

■ シラバスや授業評価のシステムは，教育改善のＰＤＣＡサイクルの中に位置づけられており，ばらばらではなく一体のシステムであるべきではないか。

■ 「概説」などの授業の目標は設定しやすいが，特殊講義の目標はことばでは表現できない。

以上のように，大学教育の改善を巡って，大学教育センターと各学部・研究科所属のほとんどの教員が一同に介して話し合うことは今までにあまりなかったので，それだけでも当該研修会を開催した意義は十分あったと思う。さらに，さまざまな議論を通じて学部や研究科の教員が大学の教育改善に対して日頃抱いている疑問点や問題点が明確化されるとともに，それに対する大学教育センターの考え方が示されたことによって，お互いの考え方の違いとともに，今後自分たちが取り組まなければならない事柄が明確化されたことが今回の研修会で最も意義のあることではなかったと考えられる。

４．平成21年度の教育改善ＦＤ研修会の内容

平成21年度は表１の(２)で示した目的を達成するために，まず，平成21年５月８日（金）に各学部のＦＤ担当の教員に集まっていただき，今年度の教育改善ＦＤ研修会の開催趣旨や研修会の日程，内容，センターから各学部・研究科への依頼事項などについて議論を行った。そしてそこで議論された内容を踏まえて研修内容や使用する教材などを再検討し，平成21年８月から各学部・研究科を巡回して当該研修会を開催した。そこで，最初に，５月８日に開催された各学部ＦＤ担当者との会議の内容を以下紹介する。

図２　農学部の教育改善研修会の様子

４．１　各学部ＦＤ担当者に対する

平成21年度の教育改善FD研修会内容の説明・協議

平成21年５月８日（金）午後５時からテレビ会議システムを利用して，各学部・研究科のＦＤ担当者を対象に，以下の内容で研修会および意見交換会が行われた。特に，この会議では平成21年度の教育改善研修会について，開催趣旨や研修内容（ＧＰ，カリキュラムマップ，シラバス，カリキュラム全体の見直し作業を実施することを明確化），作業手順（研修会の開催日程や会場のセンターへの報告，研修会の当日の日程等）等について大学教育センターから説明を行った後に意見交換が行った。

開催趣旨については，平成20年の教育改善研修会の成果を踏まえて平成21年度は，各学部・研究科で教育改善のＦＤ活動に携わっている先生方と大学教育センターとが一体となって，ＧＰ，ＣＵＭ，シラバスなどを再点検し，ＧＰを満たすようなカリキュラムを各学部・研究科で組織的に考えるきっかけとなるような教育改善研修会を開催したいという趣旨説明が行なわれた。

その後，参加者と大学教育センターとの間で意見交換が行なわれたが，参加者からは，「ＧＰやＣＵＭについて優れたモデルを示して欲しい」，「ＦＤ研修会のマップを作成したらどうか」という意見が出された。
今回初めてこのような研修会を開催したが，参加者からは各学部・研究科のＦＤ計画を立てる今の時期に，このような研修会を開催してくれてタイムリーであったという肯定的な

意見が多く出た。

また，今回の会議には昨年度後半から大学教育センターに配属された兼石教育コディネータも同席した。センター長からは教育コーディネータ（以下　ＥＣ）がどのような仕事をするのかについて先生方に対して説明があった。この中で特に，ＥＣが各学部・学科・コースのＧＰやＣＵＭ，シラバスを教育改善研修会開催前にチェックし，研修会の中でその結果や改善して欲しいことについて公表するとととともに，それに対する学部との意見交換を行いたいという説明があった。

４．２　平成21年度の教育改善研修会の内容

表３のような日程で全ての学部・研究科の各学科・課程・コースの学科長や主任および教育課程の編成責任者を対象に，大学教育センター長や兼石教育コーディネータなどが講師となって当該研修会をのべ年間８回開催した。

研修は２部構成で実施した。第１部では，山口大学ですでに作成されている教養教育ＧＰをＣＵＭに取り込み，４年間または６年間一貫した学士課程教育の形にするために，各学部の現在のＣＵＭを改訂して欲しいという依頼を大学センターから行った。また併せてＣＵＭ改訂の趣旨や具体的な記入方法についても説明を行った。後日，大学教育センターから各学部に雛形（Excel形式）を配布するので平成22年３月までにＣＵＭの改訂版を提出して欲しいとの依頼を行った。

次に，兼石教育コーディネータより，当該学部のＧＰやＣＵＭに対する大学教育センターからの意見とそれに対する学部・研究からの回答・意見交換が行われた。

第２部ではＣＦＣ作成に関するワークショップ形式の作成体験研修を行った。研修に入る前に，工学部機械工学科において「履修科目計画表」の中ですでにＣＦＣのひな形に近いものが作成されているので，これを参考資料にして，どのようにＣＦＣを作成するのかについてセンター専任教員から説明を行った。その後，各学科やコース等に開設されている科目名（現行のＣＵＭに記載してある科目）が示してあるラベル（ポストイット）を科目間の系統性や順序性，関係性，さらにＧＰの関係を考慮しながら，模造紙に貼り付けてＣＦＣの作成作業を行った。

４．３　カリキュラム・フローチャート（ＣＦＣ）の作成意義

常に学生の視点から教育内容の再検討を行えるようにカリキュラムやＧＰ，ＣＵＭなどの見直しを図ることは重要である。特に各学部で策定されているカリキュラムは教員の専門分野を中心とした，いわば教員の視点から構成されたものが多いことは否めない。しかし，現在進行している入学者の多様化と平均的な習熟度の低下に対応するためには，教員が独自の授業を展開するだけでなく，誰が何

表３　平成21年度の教育改善研修会の実施状況

① 人文学部および同関連研究科	９月25日	（金）	13:30－15:300	担当：岩部・兼石
② 教育学部および同関連研究科	11月11日	（水）	13:30－15:40	担当：岩部・小川
③ 経済学部および同関連研究科	11月４日	（水）	13:30－15:30	担当：岩部・兼石
④ 理学部および同関連研究科	10月21日	（水）	13:30－15:30	担当：岩部・兼石
⑤ 農学部および同関連研究科	10月７日	（水）	13:30－15:30	担当：岩部・兼石
⑥ 工学部および同関連研究科	８月21日	（金）	13:30－15:40	担当：岩部・兼石
⑦ 医学部および同関連研究科	８月24日	（月）	13:30－15:40	担当：岩部・兼石
⑧ 技術経営研究科（ＭＯＴ）	９月15日	（火）	13:00－15:00	担当：小川

をどこまでどのように教えるかという組織的な連携が求められるようになっている。そこで，組織的にカリキュラムを見直す一環として，各学科・課程等に開設されている科目名（現行のカリキュラムマップに記載してある科目）が示してあるラベル（ポストイット）を科目間の系統性や順序性，関係性，さらにＧＰの達成を考慮しながら，模造紙に貼り付け，ＣＦＣを完成させる作業を行った（文末の【資料２】・図３参照）。

４．４　４年間一貫の学士課程教育に基づくカリキュラム・マップ（ＣＵＭ）の再構築

今までのＣＵＭはどちらかというと専門教育の科目とＧＰの関係をマトリックス的に記述したものが多かった。しかし，現在では教養教育を含む４年間または６年間の学士課程教育を念頭に置いた教育が行わなければならないことは学士課程答申からも明白である。

そこで教養教育ＧＰをカリキュラムマップに取り込み，一貫した学士課程の形にするためにＣＵＭの改訂を各学部・学科にお願いした（図４参照）。教養教育ＧＰのカリキュラムマップは分野として項目を満足させる形になっているので，授業科目ではなく分野を記入してかまわないことも説明した。また，現状では，共通教育と学部教育が分離した形で実施されており，また教養教育と専門教育の関係は学部によっても違いがあると思われる。当面，現状を反映したままのものでかまわないので１枚の表にすることをお願いした。今後一貫した学士課程教育を構築し，教養・共通教育の在り方を検討するための出発点にもなる表なので，両者の接続や関係を意識しながら作成することも依頼した。新ＣＵＭの雛形は文末の【資料１】を参照していただきたい。

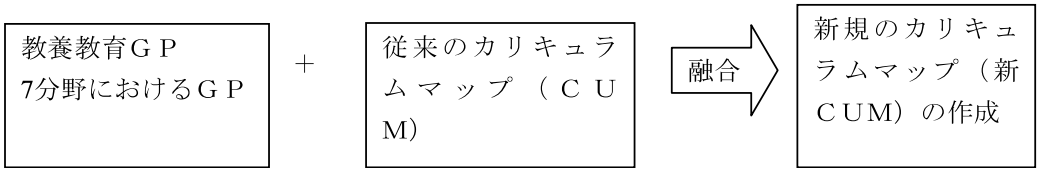
図３　医学部保健学科におけるＣＦＣの作成体験ワークショップの様子

４．５　平成21年度のＦＤ研修会の成果

平成21年度に実施した教育改善ＦＤ研修会に参加した先生方の研修終了後の意見や感想から，当該研修会については以下のような成果を上げることができたと考えている。

- ■　ＣＦＣの作成体験ワークショップを通じて各教員がカリキュラム全体とその流れを意識することができるようになった。また，科目間の相互連携を教員一人ひとりが頭に入れて，担当授業の目標設定を行うという意識を身に付けることができた。
- ■　ＧＰやＣＵＭの見直し作業を通じて，明確な到達目標の設定こそが厳格な成績評価を可能にすることを理解できるようになった。
- ■　教育改善や授業改善のための組織的ＦＤは具体的にどのように行っていくのかについて体験的に身に付けることができるようになった。

図４　ＣＵＭの内容の改訂



以上のように，学生の視点からカリキュラムを組み直すことの重要性や組織的なＦＤ活動の必要性などについて，学部教員間で共通理解できたことや学部・研究科と大学教育センターとがさまざまな形で協力し合うことができることを相互に再確認できたことは平成21年度の当該研修会を実施した上での大きな成果であったと考えられる。

４．６　平成21年度のＦＤ研修会を通して見えてきた課題

平成21年度の教育改善ＦＤ研修会を通して，以下のような課題や問題点も明らかになった。

- ■ 今回は各学科や学部のＦＤ担当者が中心になってＣＦＣ作成体験のワークショップ形式の研修を行ったが，科目間の相互連携を教員一人一人が頭に入れて，担当授業の目標設定を行うためには，今後はＧＰやＣＵＭの見直し作業やＣＦＣの作成作業などを学科やコース単位でＦＤを実施する必要がある。
- ■ 分野の特性によりカリキュラムの編成方法が異なるため，必ずしもＣＦＣで体験したようなモデルが該当しないこともある。科目の選択の幅や履修順序の自由度の高いカリキュラムにおいては，学生個別に学習内容とＧＰ達成状況を記述した学習ポートフォリオの活用も考えられる（演習・実習中心，ＧＰ達成における卒業研究の比率が非常に高いカリキュラム等）。

５．２年間の教育改善FD研修会の取組の成果

教育改善の実質化を目指して２年間にわたって，教育改善研修会を実施してきたが，この結果として教員と学生のそれぞれに以下のような成果が徐々にではあるが表れてきたと考えられる。

学生にとっては，

- ■ 養うべき基本的な資質とその達成状況を自分の目で確かめることで，学びの意義を明確化することができるようになった。
- ■ 授業の順序と関連性に配慮したカリキュラムが実現されることによって，興味関心が深まり学習意欲が向上する条件整備ができるようになった。

教員にとっては

- ■ 学生の視点からカリキュラムを組み直すことで，教育に対する意識改革が行われるようになった。
- ■ 有機的に関連づけられたカリキュラムは，最適の内容を最適のタイミングで教えることによって効率化が可能になり，無駄を省いてコストパフォーマンスの高い教育が実現できるようになった。

６．　まとめ（本取組の今後の課題）

２年間の間に上記のような成果が見られるようになったが，一方で本取組の今後に向けて達成目標をいかに測定するかといった評価の問題を中心に次のような課題が残っていると考えられる。

- ■ ＧＰやＣＵＭを策定してからこの３年間，少しずつ改訂を行ってきたが，今回は教育改善研修会の中でかなり大幅な見直しを各学科やコースにお願いすることができた。今回の改訂では教養教育と専門教育を融合した学士課程を構想し，教養教育ＧＰを含んだ新しいＣＵＭを本年度，各学科・コース・課程で策定してもらったが，来年度以降も４年間（または６年間）一貫した学士課程教育を意識したＣＵＭやＧＰの継続的な見直しを行っていく必要がある。
- ■ 今回，ＣＦＣの作成をワークショップ形式の研修で体験してもらったが，ＣＦ

Ｃはすべての学科およびコースで作成してもらう必要がある。各学科やコースでは日頃からカリキュラムの改訂に関しては話し合われているが，今回の研修を通じて参加者からは自分たちはカリキュラム全体像を意外に理解していないことに気が付いたという意見が多く寄せられた。したがって，全学的にこの取組を推進するだけでなく，学生たちに対しても目に見える形でＣＵＭやＣＦＣを公開する必要がある。

■ 今回体験したＣＦＣのモデルは工学部や理学部，医学部保健学科などの理系の学部・学科ではすぐに作成意図が理解され作業に取りかかることができた。一方で，文系の学部（人文学部や経済学部等）では，研修会で示したＣＦＣモデルでは学部・学科のカリキュラムの考え方が理系の学部・学科とは異なるため，必ずしもＣＦＣで体験したようなモデルが該当しないという意見が多く出た。結局，これらの学部ではＣＦＣの体験作業まで行うことができなかった。したがって，科目の選択の幅や履修順序の自由度の高いカリキュラムを採用している学部・学科においては，学生個別に学習内容とＧＰ達成状況を記述した学習ポートフォリオの活用も考えられる（演習・実習中心，ＧＰ達成における卒業研究の比率が非常に高いカリキュラム等）。最終的にはＧＰの達成度を評価するという観点からも学習ポートフォリオの研究をさらに深化させて行く必要がある。

（大学教育センター　教授）

【参考文献・資料】

1）中央教育審議会，2008，学士課程教育の構築に向けて（答申），文部科学省

2）我が国の高等教育の将来像（答申），2005，中央教育審議会

3）中央教育審議会，2005，「新時代の大学院教育（答申）」，文部科学省

4）文部科学省 ，2009，20年度大学教育改革プログラム合同フォーラム配布資料（ポスターセッション版）

5）文部科学省，2008，教育振興基本計画

6）川嶋太津夫，2008，「ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆」，名古屋高等教育研究第８号，173-191

7）吉田文，2008，「学際的カリキュラムの陥穽ー人文・社会系学部の学士課程カリキュラムー」，名古屋高等教育研究第８号，155-172

8）東北大学高等教育開発推進センター編，2008，「研究・教育のシナジーとＦＤの将来」，東北大学出版会

9）東北大学高等教育開発推進センター編，2007，「「大学における初年次少人数教育と「学びの転換」」，東北大学出版会

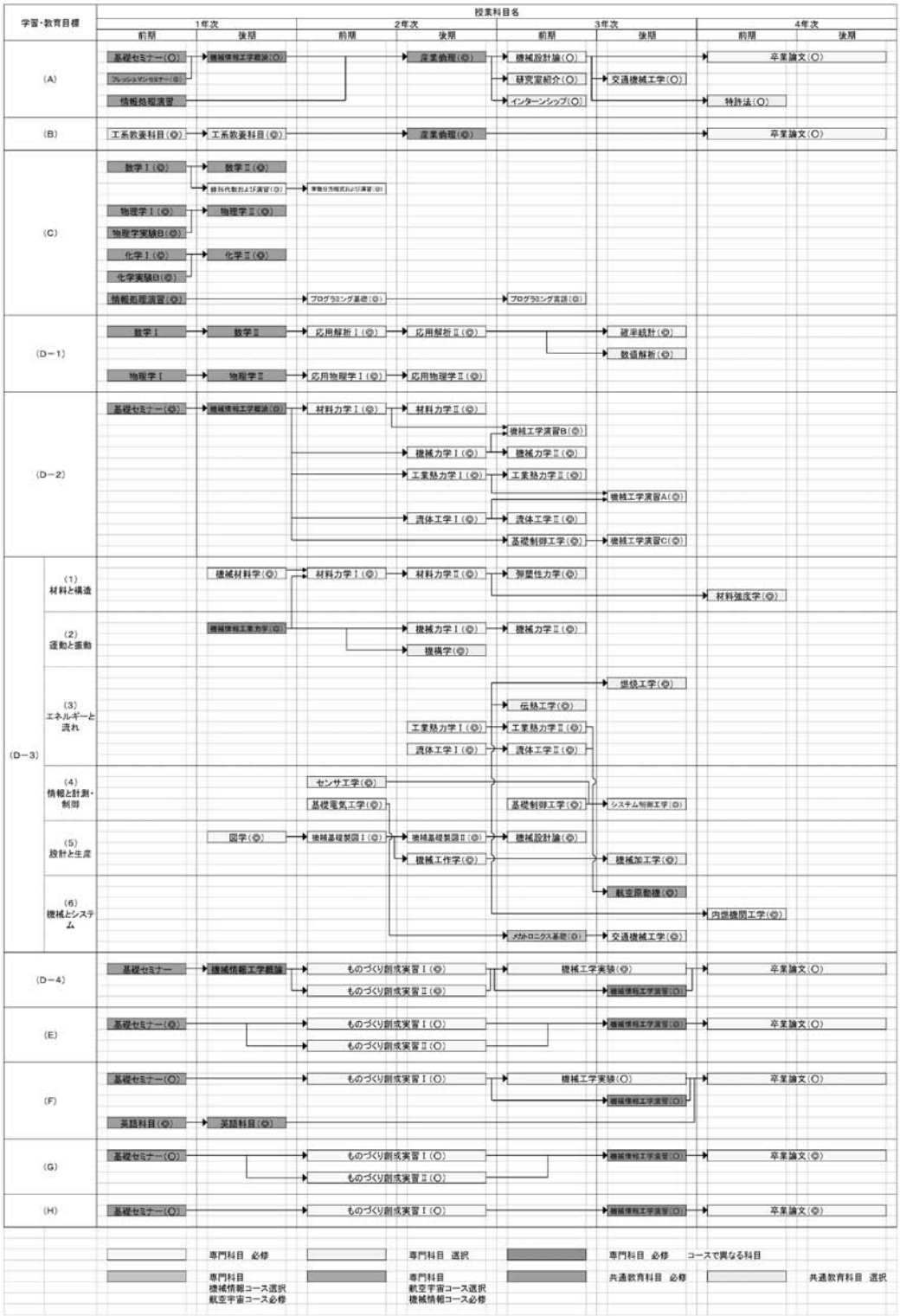
【資料１】　教養教育ＧＰを含めた一貫した学士課程教育のカリキュラムマップの雛型
【イメージ図】

共通教育科目（分野名）

							教養教育のGraduatin Policy							学科・研究科等のGraduation Policy(GP)							
科目名	科目区分	単位数	クラス名	学年	授業科目の一般目標	授業科目の到達目標（箇条書）	GP1（日本語）	GP2（情報科学）	GP3（外国語）	GP4（人文社会科学）	GP5（自然・応用科学）	GP6（健康科学）	GP7（学際領域）	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(H)
初期教育							◎							◎			◎	◎	◎	◎	◎
情報処理基礎								◎						◎		◎					
英語									◎										◎		
専門英語									○												
初習外国語									○												
日本語									○												
思想と歴史										○											
ことばと芸術										○											
人間と社会										◎					◎（必修）産業倫理						
自然科学											○										
応用科学											○										
健康とスポーツ												◎									
総合教養													○								
理系基礎											◎					◎（必修）数学Ⅰ・Ⅱ、物理学Ⅰ・Ⅱ、科学Ⅰ					
理系基礎（実験）											◎					◎（必修）物理学実験B、化学実験B					
線形代数及び演習																					
常微分方程式及び演習																◎					

共通（教養）教育のＧＰ部分

学科・コースのGP部分

（以下　省略）

【資料２】　カリキュラム・フローチャートのイメージ図（工学部機械工学科の例）